

イワンの馬鹿

SKAZKA O IVANE-DURAKE

トルストイ Tolstoi

青空文庫

むかしある国の田舎にお金持の百姓が住んでいました。百姓には兵隊のシモン、肥ふとつち満よのタラスに馬鹿のイワンという三人の息子と、つんぽでおしのマルタという娘がありました。兵隊のシモンは王様の家来になつて戦争に行きました。肥ふとつち満よのタラスは町へ出て商人になりました。馬鹿のイワンと妹のマルタは、家うちに残つて背中がまがるほどせいで出して働きました。兵隊のシモンは高い位と広い領地を得て、王様のお姫様をお嫁さんに貰いました。お給金もたくさんだし領地から上あがる収入みいりも大したものですが、彼はそれ、うまくしめくくつていくことが出来ませんでした。おまけに主人がもうけたものをお嫁さんが滅茶に使つてしまうので、いつも貧乏していなければなりませんでした。

そこで兵隊のシモンは自分の領地へ出かけて行つて収入みいりをあつめようと思いました。すると執事は言いました。

「収入みいりどころか、牛も馬も鋤すきも鋤くわもありません。何よりも先にそれを手に入れなくちゃいけません。そうすりや、やがてお金も入つて来るでしょう。」

そこでシモンは父親のところへ行つて言いました。

「お父さん、あなたはお金持なのに私にはまだ何もくれませんでした。あなたの持ちものを分けてその三分の一を私に下さい。そうすりや私の領地の手入をすることが出来ますから。」

すると年寄った父親は言いました。

「お前は家のためになることを何もしたことはない。それにどうして三分の一やることが出来るよう。第一イワンやマルタにすまない。」

と、シモンは、

「イワンは馬鹿です。それにマルタはお嫁に行く年はとづくに過ぎていて、おまけにつんばでおしです。あれ等に財産を持たしたつてそれが何になるでしょう。」

と言いました。おじいさんは、

「じゃ、イワンが何とか聞いてみよう。」

と言いました。

イワンは、

「兄さんの欲しいだけ上げなさい。」

と言いました。

そこで兵隊のシモンは父親から分前わけまえを貰ってほくほくもので自分の領地へうつしました。王様のところへ行つて仕えました。

肥満のタラスもたくさんのお金をもうけてある商人の家へおむこさんに行きましたが、それでもまだお金が欲しいと思いました。そこでやはり父親のところへ出かけて行き、

「私にも私の分け前を下さい。」
と言いました。

しかし父親はタラスにも分けてやりたくなかったので、

「お前は、何一つ家うちへは持つて来なかつた。この家うちにあるものは、みんなイワンがかせぎ上げたのだから、どうしてあれや娘によくないことが出来よう。」

と言いました。が、しかしタラスは言いました。

「イワンに何が入るものですか、あいつは馬鹿です、誰だつて嫁に来るものではありません。またあのおしだつて何にもいりはしませんよ。」

そしてイワンに向つて、

「おいイワン。おれに穀物を半分おくれよ。おれは道具なんか貰おうとは思わない。あの

葦毛あしげの馬を一匹貰おう。あれはお前の畑仕事にはちっと不向きのようだから。」

と言いました。イワンは笑って、

「何でも入るだけ持つて行くがいい。私はまたかせいで手に入れるよ。」
と言いました。

そこでタラスにも分前だけやりました。で、タラスは荷車で穀物を町へ運び、種馬をつれて行きました。こうしてイワンはよぼよぼの牝馬めうまを一匹だけ残され、以前まえ通り百姓をして両親を養つて行きました。

二

ところが、それを年よつた悪魔が見ていました。悪魔は、兄弟たちが財産の分け方けんかをするだろうと思つていたのに、べつにいさかきもなく、仲良く別れて行つたので大へん腹を立てて、早速三人の小悪魔しょうあくまを呼び集めました。そして言いました。

「ここに兵隊のシモン、肥満ふとつちよのタラス、馬鹿のイワンと言う三人の兄弟がいる。こいつらは当然けんかをしなくてはならないのに仲良く暮し合っている。あの馬鹿のイワンの

奴がすっかりおれの仕事をだいなしにしてしまったのだ。ところでお前たち三人は兄弟三人に取^とついで奴等がお互いに目玉を引っこぬくようにしてやるのだ。どうだ、出来るかな。」

「はい、一つやってみましょう。」

と三人の小悪魔は言いました。

「じゃ、どんな風にはじめる。」

「わけはありません。」

と小悪魔は言いました。

「まず第一にあいつ等を一文無しにしてしまいます。そして一^{ひと}片^{とき}のパンも無くなった時分にみんなをおち合わせることにします。そうすりゃけんかするにきまっています。」

「なるほど、そいつはいい思いつきだ。お前たちもだいぶ仕事がうまくなったようだ。じゃ、行つて来い。そしてあいつ等を仲たがいさせるまでは決して帰つて来るな。でないとお前たちの生^{なま}皮^{かわ}を引^ひむいでしまうぞ。」

小悪魔たちは早速ある沼地へ行つて仕事について打合せをしはじめました。そしてめいめいが一番割りのいい役を取ろうとしてぎろんしました。が、とうとうくじ引で役割を決

めることにしました。そしてもし一人が先に片づいたら他へ手伝いに行くことにしました。そこでくじ引をし、また日を決めて、だれがうまくやりとげたか、だれが手伝がほしいかを、知らせあうことにしました。

やがて約束の日が来ましたので、小悪魔たちは、沼地へ集まりました。すると兵隊シモンのところへ行った小悪魔が、

「おれの仕事はうまくすすんで行っている。明日シモンは親爺おやじのところへ帰るだろう。」と口を切りました。

「どうしてそううまくやったのだ。」

と仲間が聞きました。すると第一の小悪魔は、

「まず第一におれはシモンを大へんな向う見ずにしてやった。するとあいつは大たんになって、王様に、全世界を攻め取つてやると言ったのだ。ところが王様がそれをほんとにして、あいつを大将にして印度いんど王征伐にやった。両軍は向い合つて陣をとつた。ところがおれはその前の晩シモンの陣にある火薬をすっかりしめらせておき、また印度王の方にはかぞえ切れないほどの藁の兵隊をこしらえてやった。するとシモンの兵隊は、その大ぜいの藁兵にとりかこまれて、すっかりおそれてしまった。シモンは打てと命いつけた。ところ

が鉄砲も大砲も弾丸たまが出なかった。そこでシモンの兵隊はおびえて羊のように逃げ出し、印度王はそれを、すっかり討ち取った。シモンはさんざんだ。王様は大そう怒って、シモンの領地を取り上げてしまひなは明日やつを死刑にしようとしている。それでおれの仕事はあと一日だけ、あいつをあいつの田舎へ逃してやるために牢屋から出してやればいいのだ。明日になりや、お前たちに手をかしてどんなことでもしてやるよ。」

すると今度はタラスのところへ行つた第二の小悪魔が、

「おれの方は手伝つてもらわなくてもいい、うまく運んでいる。」

と言いながら、話し出しました。

「タラスはもう一週間と持ちこたえないだろう。おれはまず第一にあれをいつそうよくばりにし、肥満ふとつちよになるようにした。あいつのよくはいよいよひどくなって行つて、何でも見るものごとに買いたくなるように仕向けてやった。それであいつはあり金をすっかりつかつてしまひ、なおさかんに買い込んでゐる。もう大へん借金して買つてゐる。一週間たつとかんじようの日が来るが、その前に、おれはあいつの買い込んだ品物を、すっかりだいなしにしてやるんだ。するとあいつは支払が出来なくなつて、親爺のところへくるだろう。」

「ところで、お前の方はどうだ。」

と二人の悪魔は第三の悪魔（イワンの係）に聞きました。

「そうだな。」

と第三の悪魔は元氣なく言いました。

「おれの方はどうもうまく行かない。まずおれはあいつに、腹痛はらいを起させてやろうと思つてあいつのお茶の中に、唾を吐き込んでやった。それからあいつの畑を、石のようにかんかに固めて鋤すき返しが出来ないようにしておいた。そして、あいつはとても鋤きに出て来やしないだろうと思つていた。ところがあいつはとてつもない馬鹿で鋤を持って来て鋤きはじめた。あいつは腹が痛いので、うんうん唸りながら、それでも仕事は止めない。そこでおれはあいつの鋤を破こわしてやった。ところがあいつは家うちへ行つて別のを持って来てまた鋤きはじめた。おれは地面へもぐり込んでその鋤先を捉えた。が、鋤先にはいい捉えどころがない。あいつは一生けんめい鋤へ寄つかかる。おまけに鋤先は鋭く切れる。とうとうおれは手を切つた。あいつはその畑をほとんど鋤いてしまつて、あと小さい畝うね一つ残しただけだ。兄弟たち、一つ手を貸しに来てくれ。あいつの始末をつけないと、折角せつかくの骨折ほねおもだいなしになってしまう。もしあの馬鹿がああして畑の仕事をつづけて行くと、

あいつらは困るといふことを知らないだろう。あいつが二人の兄を養って行くだろうからね。」

兵隊のシモン係の小悪魔は明日から手伝いに行く約束しました。こうして彼等は別れました。

三

イワンは畑をたつた一畝残したきり、鋤き返しました。それでまだ腹は痛みましたが、残りの一畝を片づけるつもりで、またやって来ました。そして例の牝馬に鋤を取りつけて、仕事にかかりました。ところが、一畝鋤きおわってまた後へ鋤き返そうとすると、何か鋤が木の根にでも引つかかったように、動かなくなってしまうました。それは例の小悪魔が、りようあし両脚を鋤先からみつけて、引き戻しにかかっているのです。

「これあ妙だ。」

とイワンは考えました。

「木の根っこなんて一つもなかったのに、さてはやはりあったんだな。」

イワンは片手を畝へ突っ込んで、探りました。すると、何かやわらかいものにふれたので、それを引っ掴んで出しました。見るとそれは木の根のようにまっ黒で、しかも、のたくり廻っているのです。それはまぎれもなく、例の小悪魔でした。

「なんて汚えもんだ。」

イワンはそう言つて、鋤にぶつつけようとして、それをふり上げました。すると小悪魔は苦しがつて声をたてながら、言いました。

「どうかひどくしないで下さい。そのかわり何でもあなたの言いなり次第にいたします。」

「手前^{てめえ}何が出来る。」

「あなたの言いなりに何でも。」

イワンは頭をかいて考えました。そして言いました。

「おりや腹が痛い。どうだ、なおせるか。」

「はい、なおせますとも。」

「よし、じやなおしてくれ。」

小悪魔はすぐ畝の中へ這い込んで、しばらく爪で引っかいてさがし廻っていましたが、やがて、三本根の出た木の根を引っこぬいて来て、イワンに渡しました。そして、

「この根を一本だけお上りなさい。これを召し上がればどんな病気だってなならないことはありません。」

と言いました。

イワンはそれを受取ると、根を一本むしり取って飲みました。腹痛はらいたはそれですぐなおりました。小悪魔はまた放して下さいとたのみました。

「私はすぐさまこの地の下へ飛込んでしまいます。そして二度と再び出ては参りません。」
と言いました。

「よろしい。」

とイワンは言いました。

「じや行け、神様がお前をお守り下さるように。」

イワンが神様の名を口にするかしないかに、小悪魔は水に落ちた石のように地面へはまり込みました。そして後には小さい穴が一つ残りました。

イワンは残りの木の根二本を帽子の中へしまつて、また仕事をつづけました。そしてすっかり鋤きおえると、家うちへ帰りました。彼は馬をときはなして家うちへ入りました。するとそこには、兄の兵隊のシモンとそのお嫁さんが、夕飯ゆうめしを食っていました。シモンはその領

地をすっかり取り上げられてしまい、命からがら牢屋をぬけ出して父親の家で暮すつもりで帰って来たのでした。

シモンはイワンを見ると、こう言いました。

「おれはお前と一しよに暮すつもりでやって来たんだが、おれの主人が見つかるまでおれと家内をやしなってくれ。」

「いいとも、いいとも。」

とイワンは言いました。

「どうぞいなさるがいい。」

ところがイワンが長椅子へ腰を下そうとすると、シモンのお嫁さんがその着物の臭いの嫌って、シモンに、

「私はこんな汚い百姓と一しよに御飯をたべるのはいやです。」
と言いました。

そこでシモンは、

「お前の着物が太へん臭いので家内がいやだというのだよ。お前外へ行って飯を食ったらいいだろう。」

と言いました。

「いいとも、いいとも。」

とイワンは言いました。

「どうせ私は馬の飼葉かいばの世話をせにやららんから、外へ行こう。」

そうしてイワンは少しのパンと外套がいとうを持って牝馬をつれて野原へ行きました。

四

シモン係の小悪魔は、その晩すっかり自分の仕事をおえて、約束通りイワン係の小悪魔をたすけて、馬鹿をへこましてやるつもりで畑へやって来ました。彼はそこらあたりをさがし廻りましたが、仲間のすがたはみえないで、ただ一つ小さな穴を見つけました。

「こりやきつと仲間の上によくないことが起ったわい。するとおれがあいつの代りをしなくちやならない。この畑はすっかり鋤き返されてしまったから、あの馬鹿をとつちめるにはどうしてもあの牧場まきばだな。」

そこで小悪魔は牧場へ出かけて行って、イワンの秣場まぐさばに水をまき、草を泥だらけにし

ておきました。

イワンは野原から夜明け方に帰って来て、鎌をといで、秣場へ草刈りに出かけました。が、どうしたものか鎌を一二度ふったばかりでひどく刃がまがって、ちっとも切れなくなつて、またとがねばなりません。イワンはしばらく刈っていましたが、やがて、

「こりやいけねえ。鎌とぎ道具を持って来なくちゃ。そしてパンも持って来ることにしよう。たとえ一週間かかったつて、草を刈つてしまわずにおくものか。」
とひとりごちました。

小悪魔はそれを聞いて考え込みました。

「こいつはなかなか手に負えないぞ。こんな手じゃとても馬鹿を取っちめることは出来ない。何か他の手でやつてみなくちゃ。」

イワンは家へ帰つて鎌をといでまた草を刈りはじめました。小悪魔は草の中へもぐり込んで、その鎌の先きを捉えて、切^{きつ}尖^{さき}を地へ突つ込むようにしはじめました。イワンは、仕事が大へん骨折れると思いましたが、それでも秣場をすっかり刈りおえて、沼地に入っているとだけ少し残しました。小悪魔はその沼地へ入り込んで、
「たとえ両手を切り取られたつて、刈らせるこつちやない。」

と考えました。

イワンはやがてその沼地へ来ました。草はそう茂ってはいませんでした。が、鎌は思うように動きませんでした。イワンはすっかり怒ってしまったてある限りの力をこめて、鎌をふりはじめました。小悪魔は力負けして、もうとても持ちこたえることが出来なくなりました。いよいよだめだと思った小悪魔は、くさむらの中へよろけこんでしまいました。イワンは鎌をふつてそのくさむらを引つ掴んで刈りましたので、小悪魔はそのしつぽを半分切り取られました。イワンは刈り取った草を妹にかき寄せるように言いつけて、今度はライ麦を刈りに行きました。イワンが鎌を持って行つてみると、れいのしつぽを切られた小悪魔は先に廻つて麦を滅茶苦茶に乱しておいたので、また鎌がつかえなくなりました。それでイワンは家へ行つて、別の鎌を持って来て、それで刈りはじめ、すっかりライ麦を取り入れてしまいました。

「さて、今後は燕からすむぎ麦にかかるとにしよう。」
とイワンは言いました。

すると、しつぽを切られた小悪魔は、考えました。

「ライ麦ではあいつをうまくやつつけることが出来なかったが、燕麦ではきつとやるから、

明日になったらどうするか見てろ。」

小悪魔は翌^{あく}朝急いで燕麦の畑へ行きました。ところが燕麦はすっかり刈り倒してありました。イワンは麦粒のこぼれるのを少くするために、夜どおし刈ってしまったのでした。小悪魔はひどく怒りました。

「あの馬鹿め、おれのからだ中傷だらけにしやがるし、うんざりさせやがった。これじゃまるで戦争よりも悪いや。畜生め、ちつとも睡^{ねむ}らないんだ。あんなやつにあっちゃやとてもかなわない。ひとつ今度は麦束の中へ入って腐らしてやれ。」

そこで小悪魔はライ麦の畑へ行つて、麦束の中に入り込みました。麦束は腐りはじめました。小悪魔は、麦束を暖めました、やがて自分のからだもぼかぼかと暖くなって、ぐっすり寝込んでしまいました。

イワンは馬に草をやると、用意して妹と一しよに、ライ麦を運びにやって来ました。やがて麦束を積みはじめました。二束ほど車に投げ込んで、三束目を上げようとして熊手をつき込むと、その尖^{さき}が、小悪魔の背中へ、突き刺さりました。熊手をふり上げてみると、その尖にはしつぽの切れた小悪魔が、のがれようとして、しきりに身をもがいて、のたくついています。

「おやおや、また出て来やがった。」

「いや、ちがうんです。先来たのは私の兄弟です。私はあなたの兄さんのシモンについていたんです。」

と小悪魔は言いました。

「ふん、どいつだってかまやしない。お前も同じ目にあわしてやるのだ。」

イワンは小悪魔を荷車へたたきつけようと思いました。小悪魔は叫びました。

「ま、待つて下さい。二度とあなたの邪魔はいたしません。あなたの言いなりに何でもいたします。」

「じゃ、何が出来る。」

「何でもあなたのお好きなものから兵隊をこしらえることが出来ます。」

「兵隊は一たい何の役に立つのだ。」

「何の役にだつてたちます。あなたが命令を下しさえすればどんなことでもします。」

「じゃ唄がうたえるかい。」

「ええ出来ますとも、あなたが命令なさりさえすれば。」

「よしよし、じゃ一つこしらえてくれ。」

すると小悪魔は、

「じゃ、その麦束を一束取って地べたにつきたてて、こうおっしやればいいのです。

麦束よ麦束よ

おれの家来に命いいつける

一本一本の麦藁から

兵隊が一人ずつ飛び出して来い。」

イワンは麦束を取り上げて地べたへ叩きつけると、小悪魔の言った通りやりました。麦束がバラバラに解けて落ちたかと思うと、藁藁のこらず兵隊になって、ラツパ吹きや、太鼓打ちまでそろっていました。こうして一隊すっかり出来上りました。

イワンは面白がって笑いながら、

「こりや面白い。立派だ。娘っ子がさぞ喜ぶこつたろう。」

と言いました。

「じゃ私をはなして下さい。」

と小悪魔は言いました。

「そりゃいけない。」

とイワンは言いました。

「おれは兵隊を打うちがら殻の藁でこさえるのでなくちやいやだ。でないと折角のいい麦がだめになつてしまふ。これをもとの麦束に返す方法を教えてくれ。おれはこれから麦を落そうと思つているんだ。」

そこで小悪魔は言いました。

「それはこうです。

私の家来に命いいつける

兵隊よ兵隊よ、

元の藁に飛んでかえれ。」

イワンがこう言うときまた麦の束になりました。そこで小悪魔はたのみ出しました。

「どうぞ、はなして下さいよ。」

イワンは、

「いいとも、いいとも。」

と言つて、小悪魔を荷車の横へ押しあてると、片手でおさえながら熊手から引っこぬいてやりました。

「神様がお前をお守り下さるように。」
とイワンは言いました。

イワンが神様の名を口にするかしないかに、小悪魔は水に落ちた石のように地べたへ消えてしまいました。そして後には小さな穴が一つだけ残りました。

イワンは家うちに帰りました。家うちに帰ってみると、次の兄のタラスと、そのおかみさんが来ていて、晩飯を食っていました。

肥ふとつちよ満まんのタラスは借金で首が廻らなくなつて、父親のところへにげ帰つて来たのでした。

タラスはイワンを見て言いました。

「おい、もう一度商売が出来るまでおれと家内を養つてくれ。」

「いいとも、いいとも。」

とイワンは言いました。

「よかつたら、いつまでもいなさるがいい。」

イワンは上着をぬいで、椅子に腰を下そうとしました。するとタラスのおかみさんが言いました。

「私はこんな土百姓と一しよに御飯はいただけません。この汗の臭においつたらがまんが出来ません。」

そこで肥ふとつちよ満まんのタラスは言いました。

「どうもお前の臭いはひどすぎる。外で飯を食ってくれないか。」
するとイワンは言いました。

「いいとも、いいとも。どのみち私は馬の世話をしなくちやならん。飼葉を刈る時刻だからね。」

五

タラスの係の小悪魔も、その晩手が空すいたので、約束どおりイワンの馬鹿を取っちめるために、仲間へ手をかすつもりでやって来ました。彼は畑へ行ってさんざん仲間をさがしましたが、一人もいませんでした。ただ一つの穴を見つけただけでした。彼は今度は牧場へ行って沼地で小悪魔のしつぽ一つ見つけました。そしてライ麦の刈あとでも、一つの穴を見つけました。

「こりやきつと仲間によくないことがあったにちがいない。」
と小悪魔は考えました。

「一つおれが代つてあの馬鹿を取つちめなくちやならないぞ。」

そこで小悪魔は、イワンをさがしに出かけました。イワンはどうに麦のしまつをして、森で木を伐つていました。二人の兄たちは、急に人数がふえて、狭苦しくなったので、新しい家うちをたててもらおうと思つて、木を伐れとイワンに命いつけたところでした。

小悪魔は森へ出かけて行つて、木の枝へ這い上つて又陣どつて、イワンの仕事のじやまをしはじめました。イワンは一本の木の根元を伐りました。ところが、木はバツサリ倒れるはずなのに、倒れぎわに急にまがりくねつて、他の枝へ引つかかりました。そこでイワンは、それをこねはずすために、一本の木を伐つて棒をつくると、やつとのことで地べたに倒すことが出来ました。イワンはまた他の木を伐り倒しにかかりました。するとまた、前と同じようなことが起りました。イワンは汗びしょになりました。そしてようやく倒すことが出来ました。イワンは三本目の木に取りかかりました。が、今度もやはり同じ目にあいました。

イワンは、その日のうちに百本くらいは伐り倒すつもりでしたが、まだ十本も伐り倒さ

ないうちに日も暮れかかり、疲れてすっかりへとへとになりました。イワンの身体からだからは、汗が湯気のように立ちのぼりましたが、それでも休まないで、働きつづけました。そしてまた他の木を伐りにかかりましたが、急に背中が痛んで来て、立っていることも出来なくなりました。そこでイワンは、斧をその木の根元に打ち込むと、どっかり腰を下して休みました。

小悪魔はイワンが仕事をやめたのを見て、大へん喜びました。

「あいつめとうとうくたびれやがったな。あれでもうやめるにちがいない。どれ、おれの方もこれで一休み休むことにするかな。」

と小悪魔は考えました。

小悪魔は木の枝にまたがって、クスクス笑いました。そのときイワンは急に立ち上がって、斧を引っこぬき、別のがわからうんと一打ち喰わせましたので、木は一たまりもなくどっと倒れました。小悪魔は全くふいを打たれて、足ははずす間もなく倒れた木に手をはさまれました。イワンは枝をおろしにかかりました。ところが小悪魔がその枝にひっかかって、もがいているのを見つけました。イワンはびっくりしました。

「おやおや、汚いやつめまた出て来やがったな。」

とイワンは言いました。

「いや、ちがうんです。私はあなたの兄さんのタラスについてたんです。」
と小悪魔は言いました。

「だれであろうがかれであろうが、もうだめだぞ。」

とイワンは言つて、斧をふり上げて打ち下そうとしました。小悪魔は、

「助けて下さい。打たないで下さい。あなたのおっしゃることならなんでもいたします。」
とたのみました。

「じゃ何が出来る。」

「あなたの欲しいだけお金をこさえることが出来ます。」

「よしよし、じゃこさえてくれ。」

そこで小悪魔は、イワンにそのやりかたを教えました。

「^{かし}櫛の葉を取つて、手の中でおもみなさい。そうすりや金貨が地べたに落ちて来ます。」

イワンは何枚かの葉を取つて手の中でもみました。すると、金貨が手からこぼれ落ちました。

「これやお祭に若い者に見せるにやもつて来いだ。」

とイワンは言いました。

「じやはなして下さい。」

と小悪魔は言いました。

「いいとも、いいとも。」

とイワンは言いました。そして、棒で木の枝をこじて、小悪魔をはなしてやって、

「じゃ行け、神様がお前をお守り下さるように。」

と言いました。

イワンが神様の名を口にするかしないかに、小悪魔は水に落した石のように、地べたへ消えてしまいました。そして後には、一つだけ小さい穴が残りました。

六

こうして二人の兄たちの家^{うち}をたてて、べつべつの暮しをはじめました。そしてイワンは秋のとり入れをすまし、ビールをつくると、お祭りをするから一しよに祝ってくれといって、兄たちを招^よびました。兄たちはどうしても来ませんでした。

「百姓のお祭なんてちつとも面白くない。」
と兄たちは言いました。

そこでイワンは、百姓やおかみさんたちを招んで、御馳走を食べて酔っぱらうまでに飲みました。それから通りへ出て、村の若者や娘たちが踊っている広場へやって行きました。そして踊りの仲間に入り、女たちに、

「一つ私のために唄を唄ってくれ、そうすりや皆が生まれてまだ見たこともないものをやる。」

と言いました。

女たちは大笑いしてイワンをほめたたえる唄を歌いました。そして唄がすむと、

「さあ、約束のものをおくれ。」
と言いました。

「今すぐ持つて来るよ。」

とイワンは言いました。そして種を入れる籠を持つて森へ走って行きました。女たちは大笑いしました。

「あいつは馬鹿だ。」

と言いました。そしてもう他のことを話しこんでいました。

ところがまもなく、イワンは何か重いものを籠いっばいに入れて、帰って来ました。

「これをやろうか。」

「ああ、おくれよ。」

イワンは、金貨を一つかみつかんで、女たちにまいてやりました。すると大へんな騒ぎになって、女たちはおしあいへしあい、ころげ廻つてそれを拾いました。ぐるりの男まで拾おうとして、おし合い、引つたくりました。あるおばあさんは、人の下になって、つぶされそうになりました。イワンは大笑いしました。

「おやおや、お前たちは馬鹿だなあ。」

とイワンは言いました。

「何だつてそうおばあさんを押すんだ。静かにしろ、そしたらもつとやる。」

と言いました。そしてまたまきました。人々はイワンのぐるりを取りまいて拾いました。

イワンは持つているだけ金貨をすっかりまいてやりました。人々はもつとまけと言いました。それでイワンは言いました。

「もう何も無いよ。今度またまいてやる。さあ踊ろう。唄を歌つとくれ。」

女たちは歌い出しました。

「お前たちの唄はだめだ。」

とイワンは言いました。

「じゃ、これより上手がどこにいる。」

と女たちは言いました。

「すぐ見せてやる。」

とイワンは言いました。

イワンは納屋へ行つて麦束を取り出すと、穂をたたいて地べたへとんとたたえました。そして、

「さあ、やるぜ

麦束よ麦束よ

おれの家来に命いいつける

一本一本の麦藁から

兵隊一人ずつ飛び出して来い。」

と言いました。

すると藁束はバラバラに倒れて、数だけの兵隊になりました。太鼓やラツパを鳴らしはじめました。イワンは兵隊たちに、音楽を奏し唄を歌うように言いつけました。兵隊たちは音楽を奏し、唄を歌いました。イワンは兵隊に村中を練り歩かせました。村の人々は胆きもをつぶしてしまいました。

やがてイワンは（だれにも来てはいけないうって）兵隊を麦打ち場へつれて行きました。そしてまたもとの藁束にかえて、納屋の中へ入れておきました。

それからイワンは家うちへ帰って、厩うまやの中へころがってねてしまいました。

七

あくる朝、兵隊のシモンはそれを聞いて、イワンのところへ出かけました。

「おい、お前はあの兵隊をどこからつれて来て、どこへつれて行ったんだ。」
とたずねました。

「それを聞いてどうするんだね。」
とイワンは言いました。

「どうするってお前、兵隊さえありや何でも出来るよ。国一つでも自分のものになる。」
イワンはびっくりしました。

「ほう？　じゃ何だつて早くそう言わなかったのだね。私はいくらでも好きだけこさえることが出来たのに。まあよかった。妹とわしとでたくさん麦を打つといて。」

イワンは兄を納屋へつれて行って言いました。

「だがいいかね、わしが兵隊をこさえたらお前さんはすぐつれて行かなきゃいけないよ。兵隊をこつちで養うことになるよ、一日で村中食いつぶされてしまうからな。」

シモンは、その兵隊をみんなつれて行くことを約束しました。そこでイワンは、こさえにかかりました。イワンが一束の麦藁を麦打場へほうり出すと、ほんと一隊の兵隊があらわれました。また一束ほうり出すと、別の一隊があらわれました。こうしてたくさん作つたので、畑中一ぱいになってしまいました。

「もういいかね。」

とイワンは聞きました。

シモンは大へん喜んで、

「いいとも、いいとも。イワンよ全くありがとう。」

と言いました。

「なあに。」

とイワンは言いました。

「もつと入るようなら、また来なさるがいい。今年は麦藁はたくさんあるし、いくらでもこさえてあげるから。」

兵隊のシモンは早速その兵隊を指揮をして、隊伍をととのえると、戦いくさに出かけました。兵隊のシモンが出かけてまもなく、肥ふとつちよ満まのタラスがやって来ました。タラスは昨日のことを聞いたのです。タラスはイワンに、こう言いました。

「お前はどこから金貨を手に入れたのだね。資本もとでさえありや、おれは世界中の金かねをみんな手に入れることが出来るんだがな。」

イワンはおどろきました。そして言いました。

「そりゃ本当かね。なら、もつと早くわしに言ってくればよかった。わしはお前さんの好きなものだけこさえてあげることが出来たに。」

タラスは喜びました。

「じゃ、手桶てぶくろに三ばいだけおくれ。」

「いいとも、いいとも。じゃ森の中へ来なさるがいい。いや、待ちなさい、いいことがある。馬をつれて行こう。とてもお前さんだけじゃ持って来られそうにもないからな。」

そこで二人は馬をつれて森へ行きました。イワンは櫛の葉をмонで、たくさん金貨をこさえました。

「さあ、これでいいかね。」

タラスはすっかり喜びました。

「さしあたってそれだけありやたくさんだ。イワンよ、ありがとう。」
とタラスは言いました。

「なあにまた入るときには来なさるがいい。葉っぱはどっさり残っているからな。」
とイワンは言いました。

タラスは馬車一台に金貨をつみ込んで、商売をしに出かけました。

こうして二人の兄は出て行きました。シモンは戦に、タラスは商売に。そして、シモンは一国を平げて自分のものにし、タラスは商売で、たくさんお金をもうけました。

ところで二人の兄弟は逢ったとき、どうして兵隊を手に入れたか、どうして金を手に入れたかを話し合いました。兵隊のシモンはタラスにこう言いました。

「おれは国一つを平げて大へん立派な暮しをしている。がしかし、部下の兵隊に食わして行くだけの金がない。」

すると肥満ふとつちよのタラスはこう言いました。

「おれはまた金はどつきりもうけたがそれを番するものがない。」

すると兵隊のシモンは言いました。

「じゃ二人でイワンのところへ行こうじゃないか。あれに言っておれはもつと兵隊をこさえさせて、それにお前のお金の番をさせる。またお前はもつとあれに金をこさえさせてもらってそれでおれの部下に食べさせればいい。」

そこで二人は、イワンのところへ行きました。そして兵隊のシモンは、イワンにこう言いました。

「ねえイワン、おれのところには兵隊がもつとたりない。もう二三把分わこさえておくれ。」

イワンは頭をふりました。

「いいや、わしはもう兵隊はこさえない。」

とイワンは言いました。

「でもお前はこさえてやると約束したじゃないか。」

「約束したのは知っているが、わしはもうこさえない。」

「なぜこさえない、馬鹿！」

「お前さんの兵隊は人殺しをした。わしがこの間道みちばたの畑で仕事をしていたら、一人の女が泣きながら棺桶を運んで行くのを見た。わしはだれが死んだかたずねてみた。するとその女は、シモンの兵隊がわしの主人を殺したのだと言った。わしは兵隊は唄を歌って楽隊をやるとばかり考えていた。だのにあいつらは人を殺した。もう一人だつてこさえてはやらない。」

こう言つていつまでもがんばつて、イワンは兵隊をこさえませんでした。

肥ふとつちよ満のタラスも、もつとお金をこしらえてくれとイワンにたのみました。しかしイ

ワンは頭をふつて、

「いいや、もうこさえない。」

と言いました。

「お前はこさえると約束したじやないか。」

「そりやした。だがもうこさえない。」

「なぜこさえない、馬鹿！」

「お前さんのお金がミカエルの娘の牝牛を奪って行ったからだ。」

「どうして。」

「ただ持つて行ってしまったんだ。ミカエルの娘は牝牛を一匹もつていた。その家の子供たちはいつもその乳を飲んでいた。ところがこの間その子供たちがわしの家へやって来て、乳をくれと言った。で、わしは「お前んとの牝牛はどうしたんだ」とたずねた。すると

「肥満ふとつちよのタラスの家の支配人うちがやって来て金貨を三枚出した。するとお母つかあは牝牛をその男にくれてしまったので、おれたちの飲むものがなくなった。」と言った。わしはあの金貨を持つて遊ぶんだとばかり考えていた。ところがお前さんはあの子供たちの牝牛を奪って行った。わしはもうお金をこさえてはやらない。」

イワンはこう言つて、もう金をこさえようとはしませんでした。それで兄たちは出て行きました。そして二人は道々どうしたらいいか相談しました。そのうちに兵隊のシモンがこう言いました。

「じゃ、こうしようじゃないか。お前はおれにおれの兵隊を養うだけ金をくれるんだ。するとおれはお前におれの国を半分と、お前の金を番するのにたるだけの兵隊をやる。」

タラスはすぐ承知しました。そこで二人は自分たちの持ち物を分けて二人とも王様にな

り、お金持になりました。

八

イワンは家うちにいて両親を養い、唾おしの妹を相手に野ら仕事をして暮しました。さて、あるときのこと、イワンの家うちの飼犬が、病気にかかつてからだ中おできだらけになり、今にも死にそうになりました。イワンはそれをかわいそうに思って、妹からパンを貰って、それを帽子に入れて持って行き、犬に投げてやりました。ところが、その帽子が破れていたの
で、れいの小悪魔から貰った小さな木の根が、一つ地べたに落ちました。老としよつた犬はパ
ンと一しよにその根を食べていました。そしてそれをのみ下したと思うと、急に、はね廻
り、吠え、尾をふりはじめました。——つまり元通り元気になったのでした。

父親も母親もそれを見てすっかりおどろきました。

「どうして犬をなおしたのだ。」

と親たちはたずねました。

「わしはどんな病気でもなおすことの出来る根つこを二本持っていた。それを一つこの犬

がのんだのだ。」

とイワンは答えました。

ところが、ちょうどその頃、王様のお姫様が病気にかかりました。王様は町々村々へおふれを出して、姫をなおした者には望み次第のほう美を与える、もしそのなおした者におよめさんがなかつたら、姫をおよめさんにやるとつたえさせました。このおふれはイワンの村にも廻つて来ました。

イワンの父親と母親は、イワンを呼んで言いました。

「お前王様のおふれを聞いたかね。お前の話と、どんな病気でもなおせる木の根っ子を持つているそうだが、これから一つ出かけてなおしてあげないかな。そうすりやお前、これから一生幸^{しあわせ}福に暮せるわけだがね。」

「いいとも、いいとも。」

とイワンは言いました。

そこでイワンは、出かける仕度をしました。イワンの両親は、イワンに一番いい着物を着せました。ところがイワンが戸口を出るとすぐ、手^{てなえ}菱の乞食ばあさんに、出あいました。

「人の話で聞いて来たが、お前様は人の病気をなおしなさるそうだが、どうかこの手をな

おしておくんなさい。わしや一人じや靴もはけないからな。」

とそのばあさんは言いました。

「いいとも、いいとも。」

とイワンは言いました。そして、例の木の根っ子をくれてやって、それをのめとおばあさんに言いました。乞食ばあさんは、それをのんで、なおりました。手はわけなく動かすことが出来るようになりました。

父親と母親は、イワンについて王様のところまで行くつもりで、やって来ましたが、イワンがその根っ子をやってしまって、お姫様をなおすのが一本もなくなつたと聞いて、イワンを叱りました。

「お前は乞食女をあわれんで、王様のお姫様をお気の毒とは思わないのだ。」

と言いました。しかし、イワンは、王様のお姫様もやはり気の毒だと思っていました。それで、馬の仕度をする、荷車の中に藁をしいてその上に坐り、馬に一むちく出て出かけようしました。

「どこへ行くんだ、馬鹿！」

「王様のお姫様をなおしに。」

「だがお前はもう一本もなおせるものをもっていないじゃないか。」

「ううん、大丈夫。」

とイワンは言いました。そして馬を出しました。

イワンは王様の御殿へ馬を走らせました。ところが、イワンがその御殿のしきい闕をまたぐかまたがないうちに、お姫様はなおりました。

王様は大そう喜んで、イワンをおそば近く呼んで、大へん立派な衣しように着せました。

「わしの婿になれ。」

と王様はおっしゃいました。

「いいとも、いいとも。」

とイワンは言いました。

そこでイワンは、お姫様と御こんれいしました。そのうち王様はまもなくおかくれになったので、イワンは王様になりました。こうして三人の兄弟は一人のこらず王様になりました。

三人の兄弟はこうして、それぞれ王様になって国を治めました。長男の兵隊のシモンは大へんゆたかになりました。シモンは藁の兵隊でほんとの兵隊を集めました。かれは国中にふれを出して、家十軒ごとに兵隊一人ずつ出させました。ところがその兵隊はみんな背が高く、かおかたちの立派なものでなくてはならないのでした。シモンはそんな兵隊をたくさん集めて、うまくならしておきました。そしてもし自分にさからう者があると、すぐさまこの兵隊をさし向けて、思い通りにしまつをしたので、誰もがシモンを恐がり出すようになりました。がしかし、シモンの暮しは大へんゆかいなものでした。眼について欲しいなと思ったものは何でもシモンの所有ものでした。シモンが兵隊をさし向けると、兵隊はシモンの欲しいものを立ちどころに持って来ました。

ふとっちよ
肥満

のタラスもまたゆかいに暮していました。タラスはイワンから貰った金を少しもむだに使いませんでした。使わないばかりか、ますますそれを殖やしました。タラスは自分の国中におきてやさだめを作りました。金はみんな金庫へしまい、人民には税金をかけました。人頭税や、人や馬車には通行税、靴、靴下税、衣しよう税などをかけました。それからなお、自分で欲しいと思つたものは、何でも手に入れました。金のためには人民

は何でも持つて来るし、またどんな働きでもしました。——と言うのは、人民たち誰もかれもが金が要ったからでした。

イワンの馬鹿もやはり悪い暮しはしませんでした。亡くなった王様のおとむらいをすますとすぐ、王様の服をぬいで妃にたんす箆筒へしまわせました。そしてまた元の粗末な麻のシャツやももひき股引、百姓靴をつけて、百姓仕事にかえりました。

「あれじゃとてもやりきれない。退屈で、おまけにからだ**ぶくぶく**にふと肥**ふと**つて来るし、た食物は**ま**ずく、寝りやからだ**が**いたい。」

とイワンは言いました。そして両親や唾の妹をつれて来て元のように働きはじめました。

「あなたは王様でいらせられます。」

と人民の者が言いました。

「そりやそれにちがいない。だが王様だつて食わなけりやならん。」

とイワンは言いました。

そこへ大臣の一人がやつて来て言いました。

「金がないので役人たちに払うことが出来ません。」

「いいとも、いいとも。なけりや払わんでいい。」

とイワンは言いました。

「でも払わないと、役についてくれません。」

「いいとも、いいとも。役につかないがいい。そうすりや、働く時間がたくさんになる。役人たちに肥料こやしを運ばせるがいい。それに埃ごみはたくさんたまっている。」

そこへ人民たちが、裁判してもらいにやって来ました。そして中の一人が、言いました。「こいつが私の金を盗みました。」

するとイワンは言いました。

「いいとも、いいとも。そりやこの男に金が要ったからじゃ。」

そこで人民たちはイワンが馬鹿だと言うことに気がつきました。そこで妃はイワンにこう言いました。

「人民どもはみなあなたのことを馬鹿だと申しております。」

するとイワンは言いました。

「いいとも、いいとも。」

妃はそれでいろいろ考えてみました。しかし妃もやはり馬鹿でした。

「夫にさからってはいいいものかしら、針の行くところは糸も従って行くんだもの。」

と思いました。

そこで妃は着ていた妃の服をぬいで箆筒にしまい、唾娘のところへ行って百姓仕事を教わりました。そしてぼつぼつ仕事をおぼえると、夫の手だすけをしはじめました。

そこで賢い人はみんなイワンの国から出て行き、馬鹿ばかり残りました。

誰も金を持っていませんでした。みんなたつしやで働きました。お互いに働いて食べ、また他の人をも養いました。

一〇

年よつた悪魔は、三人の兄弟を取つちめたと言つたよりが来るか来るかと待つていました。が待つても待つても来ませんでした。そこで自分で出かけて行って、調べはじめました。かれはさんざんさがしまわりました。ところが三人の小悪魔にはあえないで、三つの小さな穴を見つけただけでした。

「てつきりやりしくじつたにちがいない。そうとすりやおれがやりやよかつた。」

そこで三人の兄弟をさがしに出かけましたが、かれらは元のところには住んでいないで、

めいめいちがった国にいるのがわかりました。三人が三人とも、いい身分になって、立派に国を治めていました。それが、年よった悪魔をひどく困らせました。

「ようし。じゃおれの腕でやらなくちやなるまい。」

と年よった悪魔は言いました。

年よった悪魔は、まず一番にシモン王のところへ、出かけました。しかし自分のほんとの姿ではなく、將軍の姿にばけて、シモンの御殿へのり込みました。

「シモン王様。」

と年寄りの悪魔は言いました。

「かねてお勇ましい御名前はよくうけたまわっております。つきまして、私も兵のことにわたくしついてはいろいろと心得ております。ぜひあなたに御奉公申し上げたいと存じます。」
と言いました。

シモン王は、いろいろたずねてみました。そして、かれが役にたつことがわかったので、そば近く置いて使うことにしました。

この新しい司令官は、シモン王に強い軍隊の作りかたを教えはじめました。

「まず第一にもつと兵隊を集めましょう。国にはまだうんと遊んでいるものがおります。」

若い者は一人残らず兵隊にしくちやいけません。すると今の五倍だけの兵隊を得ることになります。次には新しい銃と大砲を手に入れなくちやなりません。わたくし私は一時に五百発の弾丸たまを打ち出す銃をお目にかけることにいたしましょう。それは弾丸たまが豆のように飛び出します。さてそれから大砲も備えましょう。この大砲はあたれば人でも馬でも城でも焼いてしまいます。何でもみんな燃えてしまう大砲です。」

シモン王はこの新しい司令官の言うことに耳をかたむけて、国中の若者残らずを兵隊にしてしまい、また新式の銃や大砲をつくるために、新しくたくさんの工場をたてて、それらのものをこさえさせました。やがて、シモン王は、隣りの国の王に戦をしかけました。そして敵の軍隊に出あうやいなや、シモン王は兵隊たちに命令して新しい銃や大砲をあめあ雨あめ霰あられのように打ちかけて、またたく間に敵の軍隊の半分を打ち倒してしまいました。そこで隣の国の王はふるえ上って降参し、その領地のすべてを引きわたしました。シモン王は大喜びでした。

「今度は印度王をうち平げてやろう。」
とシモン王は言いました。

ところが印度王はシモン王のことを聞いて、すっかりその考えをまねてしまいました。

そしてそればかりでなく、自分の方でいろいろと工夫しました。印度王の兵隊は、若い者ばかりでなく、よめ入前の娘まで加えて、シモン王の兵隊よりもずっとたくさん兵隊を集めました。その上シモン王の銃や大砲とそっくり、同じものを作り、なお空を飛んで爆弾を投げ下す方法まで考えつきました。

シモン王は、隣の国の王を打ち負かしたと同じように印度王を負かしてやろうと考えて、いよいよ戦をはじめました。けれども、そんなに切れ味のよかった鎌も、今ではすっかり刃がかけてしまっていました。印度王はシモンの兵隊が弾丸たまのあたる場所まで行かないうちに、娘たちを空へ出して爆弾を投げ下させました。娘たちは、まるで油あぶらむしに砂でもまくように、シモンの兵隊の上に、爆弾を投げ下しました。そこで、シモン王の兵隊は逃げ出し、シモン王一人だけ、とり残されてしまいました。印度王はシモンの領地を取り上げてしまい、兵隊のシモンは命からがら逃げ出しました。

さて、年よった悪魔はこちらを片づけたので今度はタラス王の方へ向いました。かれは商人に化けてタラスの国に足をとめ、店を出して、金を使いはじめました。かれは買つても大へん高くお金を払うので、誰もかもお金欲しさに、どしどしこの新しい商人のところへ集まって来ました。そこで大したお金が人々のふところに入って、人民たちはとど

こおりなく税金を払うことが出来ました。

タラス王はほくほくもので喜びました。

「今度来たあの商人は気に入った。これでおれはよりたくさんのお金を残すことが出来た。したがっておれの暮しはますますゆかかになるというものだ。」
とタラス王は思いました。

そこでタラス王は、新しい御殿をたてることにしました。かれは掲示を出して、材木や石材などを買入れることから、人夫を使うことをふれさせ、何によらず高い価ねを払うことにしました。タラス王はこうしておけば、今までのように人民たちが先を争って来るだろう、と考えていました。ところが、驚いたことには、材木も石材も人夫もすつかりれない商人のところへ取られてしまいました。タラス王は価ねを引き上げました。すると商人は、それよりもずつと上につけました。タラス王はたくさんのお金がありました、れいの商人はもつとたくさん持つています。で、商人は何から何までタラス王の上に出ました。

タラス王の御殿はそのまま、普請ふしんはちつともはかどりませんでした。

タラス王は庭をこさえようと考えました。秋になったので、その庭へ木を植えさせるつもりで、人民たちを呼びましたが、誰一人やって来ませんでした。みんな、れいの商人の

家の池を掘りに行っていました。冬が来て、タラス王は、新しい外套につける黒貂くろてんの皮が欲しくなったので、使つかいの者に買わせにやりました。すると使つかいのものは帰かへって来て、言いました。

「黒貂の皮は一枚もございません。あの商人がすっかり高価たかねで買いしめてしまつて、敷物をこさえてしまいました。」

タラス王は今度は馬を買おうと思つて、使つかいをやりました。すると使つかいの者が帰かへつて来て言いました。

「あの商人が、残らず買つてしまいました。池に満たす水を運ばすためでございます。」
タラス王のすることは、何もかも、すっかり止まつてしまいました。人民たちは誰一人金を、王のところへ持つて来て納めるだけでした。こうして、タラス王はしまい切れないほどの金を集めることは出来ましたが、その暮しといつたら、それはみじめになりました。王はもういrownなくわだてをやめて、ただ生きて行けるだけですがまんするようになりましたが、やがてそれも出来なくなりました。すべてに不自由しました。料理人も、馭ぎよしや者も、召使も、家来も、一人々々王を置き去りにして、れいの商人のところへ行つてしまいました

た。まもなく食物たべものにもさしつかえるようになりました。市場へ人をやってみると、何も買うものがありませんでした。——つまり例の商人が何もかも買い占めてしまつて、人民たちはただ税金だけ王のところへ納めに来るだけでした。

タラス王は大へん腹を立てて、例の商人を国より外へ追い出してしまいました。ところが商人は、国ざかいのすぐ近くへ住まつて、やはり前と同じようにやっています。人民たちは金欲しさに王をのけ者にしてしまつて、何でもすべて商人のところへ持つて行つてしまいました。

タラスはいよいよ困つてしまいました。何日もの間、食べるものがありませんでした。そしてうわさに聞くと、例の商人は今度はタラス王をかうと言つて、いばつていふと言ふことでした。タラス王はすっかり胆をつぶして、どうしていいかわからなくなつてしまいました。

ちようどこの時兵隊のシモンがやつて来て、

「助けてくれ、印度王にすっかりやられてしまった。」
と言いました。

しかし、タラス王自身も動きのとれないくらい苦しい立場になつていましたので、

「おれももう二日間というもの何一つ食べるものがないのだ。」
と言いました。

一一

二人の兄たちを取っちめてしまった年よつた悪魔は、今度はイワンの方に向いました。かれは將軍の姿に化けて、イワンのところへ行つて、軍隊をこさえなければいけないとすすめました。

「軍隊がなくては王様らしくありません。一つ私に命令して下さいれば私は人民たちから兵隊を集めて、こさえ御覧に入れます。」
と言いました。

イワンはかれのいうことをじつと聞いていましたが、

「いいとも、いいとも。じゃ一つ軍隊をこさえ唄を上手に歌えるようにしこんでくれ。私は兵隊が歌うのを聞くのは好きだ。」
と言いました。

そこで年よつた悪魔は、イワンの国中を廻めぐつて兵隊を集めにかかりました。かれは人々に、軍隊に入れば酒は飲めるし、赤いきれいな帽子を一つ貰える、と話しました。

人々は笑つて

「酒はおれたちで造るんでどつさりある。それに帽子はすじの入つた総ふさつきのでも女たちがこさえてくれる。」

と言いました。

そして誰一人兵隊になるものがありませんでした。

年よつた悪魔はイワンのところへ歸つて来て、言いました。

「どうも馬鹿共は、自分で進んでやろうとはしません。あれじやいやでも入らせなくちやなりませんでしょう。」

「いいとも、いいとも。やつてみるがいい。」

とイワンは言いました。

そこで年よつた悪魔は、人民たちはすべて兵隊に入らなくてはならない。これを拒むものはイワン王が死刑にしてしまわれるだろう、というおふれを出しました。

人民たちは將軍のところへやつて来て、言いました。

「兵隊にならなければイワン王が死刑にしようと言っているが、兵隊になったらどんなことをするのかまだ話を聞かせてもらわない。兵隊は殺されると聞いているがほんとかい。」

「うん、そりや時には殺される。」

これを聞いて人民たちはどうしてもきかなくなりました。

「じゃ、兵隊に行かないことにしよう。それよつか家^{うち}で死んだ方がましだ。どうせ人間は死ぬもんだからな。」

と人民たちは言いました。

「馬鹿！お前たちはまったく馬鹿だ！兵隊に行きや必ず殺されるときまってやしない。だが行かなきゃイワン王に殺されてしまうんだぞ。」

人民たちはまったく途方にくれてしまいました。そしてイワンの馬鹿のところへ相談に行きました。

「將軍さまが、わしらに兵隊になれとおっしゃる。兵隊になりや殺されることがある。しかしならなきゃ、イワン王がわしらをみんな殺される、と言う話ですがほんとですか。」
イワンは大笑いして言いました。

「さあ、わしにもわからん。わし一人でお前さん方をみんな殺すことは出来ないしな。わしが馬鹿でなかつたら、そのわけを話すことも出来るが、馬鹿なんでさっぱりわからんのだ。じゃ。」

「それじゃわしらは兵隊にやなりません。」
と人民たちはいいました。

「いいとも、いいとも。ならんでいい。」
とイワンは答えました。

そこで人民たちは、將軍のところへ行つて、兵隊になることをことわりました。年よつた悪魔はこの企ての駄目なことを見て取りました。そこでイワンの国を出て、タラカン王のところへ行つて言いました。

「イワン王と戦をしてあの国を取つてしまつてはいかがでしょう。あの国には金はちつともありませんが、穀物でも牛馬うしうまでも、その他何でもどつさりあります。」

そこでタラカン王は戦のしたくに取りかかり、大へんな軍隊を集めて、銃や大砲をよういすると、イワンの国へおしよせました。

人民たちは、イワンのところへかけつけてこう言いました。

「タラカン王が大軍をつれて攻めよせて来ました。」

「あ、いいとも、いいとも。来さしてやれ。」

とイワンは言いました。

タラカン王は、国ざかいを越えると、すぐ斥候を出して、イワンの軍隊のようすをさぐらせました。ところが、驚いたことにさぐつてもさぐつても軍隊の影さえも見えません。今にどこからか現われて来るだろうと、待ちに待っていました。やはり軍隊らしいものは出て来ません。また、だれ一人タラカン王の軍隊を相手にして戦するものもありませんでした。そこでタラカン王は、村々を占領するために軍隊をつかわしました。軍隊たちが村に入ると、村の者たちは男も女も、びっくりして家を飛び出し、ものめずらしそうに見ています。軍隊たちが穀物や牛馬などを取りにかかると、要るだけ取らせて、ちつとも抵抗しませんでした。次の村へ行くと、やはり同じことが起りました。そうして軍隊たちは一日二日と進みましたが、どの村へ行つても同じ有様でした。人民たちは何でもかでも軍隊たちの欲しいものはみんな持たせてやって、ちつとも抵抗しないばかりか、攻めに来た軍隊たちを引きとめて、一しよに暮そうとするのでした。

「かわいいそうなたちだな。お前さんたちの国で暮しが出来なけりや、どうしておれたち

の国へ来なさないんだ。」

と村の者たちは言うのでした。

兵隊たちはどんどん進みました。けれどもどこまで行っても軍隊にはあいませんでした。ただ働いて食べ、また人をも食べさせてやって、面白く暮らしていて、抵抗てむかいどころか、かえって兵隊たちにこの村に来て一しよに暮せという者ばかりでした。

兵隊たちはがっかりしてしまいました。そして、タラカン王のところへ行つて言いました。

「この国では戦が出来ません。どこか他の国へつれて行って下さい。戦はしますがこりや一たい何ごとです。まるで豆のスープを切るようなものです。私たちはもうこの国で戦をするのはまっぴらです。」

タラカン王は、かんかんに怒りました。そして兵隊たちに、国中を荒しまわって、村をこわし、穀物や家を焼き、牛馬をみんな殺してしまえと命令しました。そして、

「もしもこの命令に従わない者は残らず死刑にしてしまふぞ。」
と言いました。

兵隊たちはふるえ上つて、王の命令通りにしはじめました。かれらは、家や穀物などを

焼き、牛馬などを殺しはじめました。しかし、それでも馬鹿たちは抵抗てむかわないで、ただ泣きだけで泣きました。おじいさんが泣き、おばあさんが泣き、若い者たちも泣くのでした。

「何だってお前さん方あ、わしらを痛めなさるだあ、何だって役に立つものを駄目になさるだあ。欲しけりやなぜそれを持って行きなさらねえ。」
と人民たちは言うのでした。

兵隊たちはとうとうがまんが出来なくなりました。この上進むことが出来なくなりました。それで、もういうことをきかず、思い思いに逃げ出して行ってしまうました。

一一一

年よった悪魔はこの手段を止よす外ほかありませんでした。兵隊を使ったんじや、とてもイワンを取っちめることは出来ませんでした。そこで今度は姿をかえて、立派な紳士に化けて、イワンの国に住みこみました。かれは肥ふとつちよ満まのタラスをやっつけたように、金の力でイワンをやっつけてやろうと考えたのです。

「一つ私はあなた様にいいことをしたいと思ひます。よい智慧をおかししたいと存じます。

で、まずお国に家を一軒たてて、商売をはじめましょう。」
と年よった悪魔は言いました。

「いいとも、いいとも。気に入ったらこの国へ来て暮してくれ。」
とイワンは言いました。

翌くる朝この立派な紳士は、金貨の入った大きな袋と一枚の紙片かみきれを持って広小路へ出て、こう演説しました。

「お前たちはまるで豚のような生活をしている。私はお前たちにもっといい暮し方を教えてやる。お前たちはこの凶面を見て一つ家をこさえてくれ。お前たちはただ働けばよろしい。そのやり方は私が教え、おれいは金貨で払ってやる。」

そう言っただけは金貨をみんなに見せました。馬鹿な人民たちはびっくりしました。これらの間には、これまで金と言うものがありませんでした。かれらは品物と品物を取かえ合ったり、仕事は仕事でかんじようし合っていたのでした。そこでみんなは、金貨を見て驚きました。

「まあ、何て重宝なもんだらう。」
と言いました。

それで、かれらは品物をやったり仕事をしたりして、紳士の金貨と取っかえはじめました。年よった悪魔は、タラスの国でやったと同じように、金貨をどしどし使い、人民たちは何でもかでも、またどんな仕事でも金貨と取っかえるためにやってのけました。

年よった悪魔はほくほくもので喜びました。そして、

「今度はなかなか運びがいい。これじゃあの馬鹿もそのうちにタラス同様、からだ身体からたましい霊までおれのものにしてしまえるぞ。」

とひとりで考えました。

しかし馬鹿どもは、金貨を手に入れるとすぐ、それを女たちにやって首飾にしてしまいました。娘たちはそれをおさげの中につけて飾りました。そして後には子供たちが、往来のまん中で、玩具おもちゃにして遊びはじめました。誰もかも金貨をたくさん貰って持っていました。そこでもう貰おうとするものはなくなりました。けれども立派な紳士の家は、半分も出来てはいないし、その年入いりよう用の穀物や牛などの用意も出来ていませんでした。そこで働きに来てもらいたいことだの、穀物や牛などを買いたいことだのを知らせて、もつとたくさんの金貨をやることにしました。

しかし、働く人も、品物を持つて来る人もありませんでした。時たま男の子や女の子た

ちが走つて来て、卵と金貨を取つかえてもらうくらいでした。他には誰も来なかつたので、紳士は食物たべもの一つありませんでした。そこでれいの紳士は、空腹すきはらを抱えて何か食べるものを買おうと村へ行つて、ある家うちに入りました。そして、鳥を一羽売ってもらおうと思つて金貨を一枚出しましたが、そこのおかみさんは、どうしてもそれを受取りませんでした。

「私やたくさん持つています。」

と言いました。

今度は鰯にしんを買おうと思つて、寡婦ごけさんのところへ行つて金貨を出すと、

「もうたくさんです。」

と言いました。

「私の家うちにやそれを持つて遊ぶような子供はいないし、それにいいもんだと思つてもう三枚もしまつてありますからな。」

と言つてことわりました。

かれは今度は百姓家へ行つて、パンと取つかえようと思いました。けれどもやはり受取るうとはしません。

「そりやいらぬ。だが、お前さんが『キリスト様の御名によつて』とおっしゃるなら、

ちよつと待ちなされ、家内に話して一ひと片貫きりつて上げましょうから。」

と言いました。（『キリスト様の御名によつて』という言葉は露ろ西し亜やの乞食や巡礼たちが、物を下さいと言う前に必ず言う言葉で、「御生ですから」とか、「どうかお願いですから」といった意味の言葉です。）

それを聞くと悪魔は唾を吐いて逃げ出しました。キリストの名を唱えたり聞いたりすることは、小刀ナイフで突き倒されるよりも痛くこたえるからでした。

こうしてとうとうパンも手に入れることが出来ませんでした。誰もかも金貨を持つていたので、年よつた悪魔はどこへ行つても、金で何一つ買うことは出来ませんでした。みんなたれもが、

「何か他の品物を持つて来るか、でなけりやここへ来て働くか、またはキリスト様の御名によつてゐるものを貰うがいい。」

と言います。

しかし、年よつた悪魔は、金より他には何一つ持つていませんでした。働くことはかれ大へんきらいなことだし、「キリスト様の御名によつて」物を貰うことなどかれにはどうしたつて出来ないことでした。年よつた悪魔はひどく腹をたててしまいました。

「おれが金をやると言うのに、それより他の何が欲しいと言うんだ。金さえありや何だつて買えるし、どんな人夫だつて雇えるんだ。」

と悪魔は言いました。しかし、馬鹿たちはそれに耳をかそうとはしませんでした。

「いいや、わしらには金は要らない。わしらにや別に払いがあるわけじゃなし、税金も要らないから、貰ったところで使い道がないからな。」

と言うのでした。

年よつた悪魔はひもじい腹を抱えて、ゴロリと横になりました。

すると、このことが、イワンの耳に入りました。人民たちは、イワンのところへ来て、こうたずねました。

「どうしたもんでしよう、立派な紳士が倒れています。あの人は、食い飲みもするし着飾ることもすきだが、働くことがきらいで、『キリスト様の御名によって』物を貰うことをしません。ただ誰にでも金貨をくれます。世間じやはじめのうちにはあの人の欲しがるものをくれてやったが、金貨がたくさんになったので、今じゃ誰もあの人にくれてやるものありません。どうしたもんでしよう、あのままじゃ餓え死んでしまいます。」

イワンはじつと聞いていました。そして、

「いいとも、いいとも。そりや、みんなで養つてやるがいい。牧羊者のように一軒一軒かわり番こに養つてやるがいい。」

これより外ほかに仕方がありませんでした。年よつた悪魔は、かわり番こに家々を廻つて食事をさせてもらうようになりました。

そのうちに番が来て、イワンの家うちへ行くことになったので年よつた悪魔は御馳走になりやつて来ました。すると、れいの唾の娘が食事の仕度をしているところでした。

唾娘は今までに、たびたびなまけ者にだまされていました。そんな者に限つて、ろくすつぽ受持の仕事はしないで、誰よりも食事に早くやつて来て、おまけに人の分まで平げしてしまうのです。そこで娘は手を見て、なまけ者を見分けることにしました。ごつごつした硬い手の方はすぐテーブルにつかせましたが、そうでない人は、食べ残しのものしかくれてやりませんでした。

年よつた悪魔はテーブルにつきました。すると唾娘は、早速その手を捉えて、調べにかかりました。ところが手にはちつとも硬いところがありません。すべすべしていて、爪が長く延びていました。唾娘は唸りながら、悪魔をテーブルから引きはなしました。するとイワンのおよめさんが言いました。

「悪く思わないで下さい。あれはごつごつした手を持った人でないと、テーブルにはつかせないんです。でもちよつとお待ちなさい。みんなが食べてしまったら、後でその残りをあげますから。」

年よつた悪魔はひどく気を悪くしてしまいました。王様の家で自分を豚同様に扱っているのです。かれはイワンに言いました。

「誰もかも手を使って働かなきゃならないなんて、お前の国でももつとも馬鹿気た律法だ。こんなことを考えるのも言わばお前が馬鹿だからだ。賢い人は何で働くか知っているか？」

するとイワンは言いました。

「わしらのような馬鹿にどうしてそんなことがわかるもんか。わしらは大抵の仕事は手や背中を使ってやるんだ。」

「だから馬鹿と言うんだ。ところがおれは頭で働く方法を一つ教えてやろう。そうすりや手で働くより頭を使った方がどんなに得だかわかるだろう。」

イワンはびつくりしました。そして、

「そうだとすりや、なるほど私らを馬鹿だと言うのももつともだ。」

と言いました。

そこで年よつた悪魔は言葉をつづけて、

「しかしただ頭で働くのはよいじゃない。おれの手に硬いところがないと言ってお前たちはおれに食物たべものをあてがわれないが、頭で働くことはそれよりも百倍もむずかしいと言ふことをちつとも知らない。時としちや、全く頭がさけてしまうこともある。」

「イワンは深く考え込みました。」

「ほう？　じゃ、お前さん、お前さん自分自身でどうしてそんなに自分を苦めているんだね。頭が悪い時や、気持はよくないだろうしね。それよりや手や背中を使つてもっと楽な仕事したらよさそうなもんだがね。」

しかし悪魔は言いました。

「おれがそんなことをするのも、みんなお前たち馬鹿どもがかわいそうだからだ。もしおれがそうしないと、お前たちやいつまでたつても馬鹿だ。だが、おれは頭で仕事をしたおかげで、お前たちにそれを教えてやる事が出来るんだ。」

イワンはびつくりしました。

「じゃ、わしらを教えてくれ。わしらの手が萎えしびれた時に、そのかわりに頭で仕事をするようにね。」

とイワンは言いました。

悪魔は人民たちに教えることを約束しました。そこでイワンは、あらゆる人たちに頭で働くことを教えることの出来る立派な先生が来たこと、その先生は手よりも頭でやる方がずっと仕事が出来ること、人民たちは残らずこの立派な先生に教わりに来てよく習わなければならぬことだのを、ふれさせました。

イワンの国には一つの高い塔がありました。その塔には、てつぺんにまで登ることの出来る階段がついていました。イワンはすべての人民たちが顔をよく見ることが出来るように、その立派な紳士を塔の上へつれて行きました。

そこで、れいの紳士は、塔のてつぺんに立って演説をしはじめ、人民たちはかれを見ようとして集まりました。人民たちはこの紳士が手を使わないで頭で働く方法を見せてくれるものと思っていました。しかし、かれはどうしたら働かないで生活くらしを立てて行けるかということを、くりかえしくりかえし話しただけでした。人民たちは何が何だか、ちつともわかりませんでした。人民たちは紳士を見、考え、また見ましたが、とうとうおしまいはめいめいの仕事をするために立ち去りました。

年よつた悪魔は塔のてつぺんに一日中立っていました。それから二日目もやはりたてつ

づけにしゃべりました。しかしあまり長くそこに立っていたためにすっかりお腹を空^{すか}してしまいました。しかし、たれもが塔の上へ食^{たべ}物を持って行くことなど考えもしませんでした。手で働くよりもつとよく頭で働くことが出来ると思ったらパンのよういくらいはもちろんのことだと思つたからでした。

その次の日も、年よつた悪魔は塔のてっペンに立ってしゃべりました。人民たちは集まつて来て、ちよつとの間立つて見ていましたが、すぐ去つて行きました。

イワンは人民たちに聞きました。

「どうだな。少しや頭で仕事をしはじめたかな。」

すると人民たちは言いました。

「いいや、まだはじめません。先生あいかかわらずしゃべりつづけています。」

年よつた悪魔はまた次の日も一日塔の上に立っていました。が、そろそろ弱つて来て、前へつんのめつたかと思うと、あかり取りの窓の側^{そば}の、一本の柱へ頭を打つつけました。それを人民の一人が見つけて、イワンのおよめさんに知らせました。するとイワンのおよめさんは、野良に出ているイワンのところへ、かけつけました。

「来てごらんさい。あの紳士が頭で仕事をやりはじめたそうですから。」

とイワンのおよめさんは言いました。

「ほう？ そりゃほんとかな。」

とイワンは言つて、馬を向け直して、塔へ行ききました。ところがイワンが塔へ行きつくまでに、年よつた悪魔はお腹が空いたのですっかり元気はなくなり、ひよろひよろしながら、頭を柱に打ちつけていました。そしてイワンが塔へちようどついた時、年よつた悪魔はつまりずいてころぶと、ごろごろと階段をころんで、その一つ一つに頭をゴツンゴツンと打ちつけないがら、地べたへ落ちて来ました。

「ほう？ やつぱりほんとだつたな、人間の頭がさけると言つたのは。でも、こりやみずぶ水腫くれどころじやない。こんな仕事じゃ、頭はコブだらけになつてしまふだろう。」

とイワンは言いました。

年よつた悪魔は階段の一ばん下のところで一つとんぼがえりをして、そのまま地べたへ頭を突つ込みました。イワンはかれがどのくらい仕事をしたか見に行こうとしました。——その時急に地面がぱつとわれて紳士は中へ落っこちてしまいました。そしてそのあとにはただ一つの穴が残りました。

イワンは頭をかきました。

「まあ何ていやな奴だろう。また悪魔だ。大きなことばかり言つてやがつて、きつとあいつらの親爺に違いない。」

とイワンは言いました。

イワンは今でもまだ生きています。人々はその国へたくさん集まつて来ます。かれの二人の兄たちも養つてもらつてもらうつもりで、かれのところへやつて来ました。イワンはそれらのものを養つてやりました。

「どうか食物たべものを下さい。」

と言つて来る人には、誰にでもイワンは、

「いいとも、いいとも。一しよに暮すがいい。わしらにや何でもどつさりある。」
と言いました。

ただイワンの国には一つ特別なならわしがありました。それはどんな人でも手のゴツゴツした人は食事のティブルへつけるが、そうでない人はどんな人でも他の人の食べ残りを食べなければならぬことです。

青空文庫情報

底本：「小學生全集第十七卷 外国文藝童話集上巻」興文社、文藝春秋社

1928（昭和3）年12月25日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「一層↓いっそう か知ら↓かしら 位↓くらい 毎↓ごと 此の↓この 凡て↓すべて
大分↓だいぶ 一寸↓ちよつと て置↓てお て見↓てみ て貰↓てもら 何處↓どこ
どの道↓どのみち 中々↓なかなか 殆ど↓ほとんど 先づ↓まず 又↓また 迄↓ま
で 間もなく↓まもなく 若し↓もし や否や↓やいなや 私↓わし」

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（加藤祐介）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2004年5月18日作成

2005年12月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

イワンの馬鹿

SKAZKA O IVANE-DURAKE

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 トルストイ Tolstoi

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>